

瀬田東小学校2024年度(令和六年度) 校内研究

(1)研究主題

豊かな表現力を身につけ、ともに学び合う子どもの育成
～PDCAサイクルを活用した学年研究を通して～

(2)研究主題概要

本校では、学校教育目標として「心身ともにたくましく、ひととの交わりを大切にし、新しいものを創り出そうとする子どもの育成」を掲げている。この学校教育目標を達成するためには、「①主体性 ②ことばの力 ③想像する力 ④寄り添う心」を授業の中で育てていく必要がある。これらの4つの点は、豊かな表現力を身につけた子どもたちが、学び合いを進めていく中で育まれていくものだと考える。

また、昨年度の全国学力・学習状況調査に目を向けると、国語科、算数科ともに表現する力に課題が見られる。国語科では「自分の考えが伝わるようにグラフなどを用いて、表現のしかたを工夫する力」、算数科では「表やグラフからデータの捉え、考察してわかったことを表現する力」が他の項目と比べて低い。このことから、本校の児童に対しては、表現力を育むことを中心に据えた授業づくりが必要であることがわかる。

以上のことから、本校における課題を改善し、学校教育目標で掲げる子どもの姿に迫っていくために『豊かな表現力を身につけ、ともに学び合う子どもの育成』を今年度の研究主題とする。

(3) 研究の内容と方法

- ①「主体性」「ことばの力」「想像する力」「寄り添う心」を育むためには、子どもがどのような表現力を身につけ、子ども同士にどのような学び合いが生まれていけばよいのか、めざす子どもの姿を具体的に思い描く。
- ② 豊かな表現力を身につけ、ともに学び合う子どもを育むためには、どのような手立てが有効なのかを明らかにしていく。
- ③ 豊かな表現力を身につけ、子ども同士がともに学び合う授業づくりを行うことで「主体性」「ことばの力」「想像する力」「寄り添う心」はどのように育まれていくのかを明らかにする。
- ④ 以上の研究はすべて学年単位で行う。一年のはじめに学年の研究計画を立て、PDCAサイクルを活用しながら、年間を通して研究を進めていく。2月の全体会では学年ごとに実践発表を行う。
- ⑤ 一年間に一本、学年の研究計画に沿った授業を学校全体に公開する。授業参観を通して、学んだこと、考えたことを教師同士が交流し、それぞれの学びを振り返りシートに記入する。振り返りに書かれたことは、研究通信を通して焦点化し、学校全体に広げていく。
- ⑥ 学年の授業公開とは別に、有志の授業公開を行う。他の教師の授業から主体的に学んでいける環境をつくる。

(4)過去5年間の研究主題

平成31年度(令和元年度)(2019年度)

「主体的・協働的な学習活動を通して、考えを深めていく授業の創造」
～考えを広げ深めていくための言語活動を軸とした授業づくり～

令和2年度(2020年度)

「主体的・協働的な学習活動を通して、表現する力を磨く授業の創造」
～授業間を効果的につなぐ家庭学習の在り方～

令和3年度(2021年度)

「主体的・対話的な学習活動を通して、共に高め合い夢中になっていく体育科学習」
～学びをつなぎ、子どもをつなぐ単元デザイン～

令和4年度(2022年度)

「主体的・対話的な学習活動を通して、共に高め合い夢中になっていく体育科学習」
～学びをつなぎ、子どもをつなぐ単元デザイン～

令和5年度(2023年度)

「ことばを大切にし、ともに高め合う子どもの育成」
～身を取り出して聴きたくする授業を目指して～

(5)今年度の日程

月	校 内 研 究
4	【4月19日(金)】 全体研究会 今年度の研究テーマについて
6	【6月5日(水)】 公開授業① 2年生 生活科「どきどき わくわく まちたんけん」 【6月26日(水)】 公開授業② わかあゆ 自立活動・生活単元「わかあゆモールへようこそ」
7	【7月10日(水)】 公開授業③ 3年生 国語科「まいごのかぎ」
9	【9月18日(水)】 公開授業④ 4年生 社会科「受けつがれてきた行事と先人のはたらき」 【9月25日(水)】 公開授業⑤ 5年生 国語科「きつねの窓」
10	【10月29日(水)】 公開授業⑥ 1年生 算数科「3つのかずのたしざん、ひきざん」
12	【12月18日(水)】 公開授業⑦ 6年生 国語科「ぼくのブックウーマン」
1	【1月17日(金)】 公開授業⑧ 6年生 国語科「海の命」
2	【2月19日(水)】 全体研究会 今年度の研究のまとめ

(6) 今年度の取り組み (1年生)

いろいろな考えを導き、そのよさを認め合える算数科授業

□実践報告

一人ひとりが具体的操作ができるように、すぐに使える算数科の教具として、算数ボックスを活用してきた。数え棒のケースやおはじきボードなどを教具としてうまく使うことで子どもたちの多様な表現を引き出すことをねらった。

また、クラスで学び合うために、「①自分で考える ②ペアで考える ③グループで考える ④クラスで考える」の4つの学び合う機会があることを経験してきた。どんな時に、どの学び合い方をするかがわかるように、話し合う時に図で提示した。

□成果と課題(○成果、▲課題)

○教師が意図的にペア活動やグループ活動の機会を図で示し、話し合う時間を確保したことで、それぞれの場での話し合いが活発になり、自分の考えを伝えようとする姿、友だちの考えを聞いて自分の考えを広げ深める姿が見られた。話し合いの様子から、教師が意図的に指名をすることで、子どものつまずきや間違いを子ども同士で考えたりするなど、より深く課題に向き合う姿が見られた。

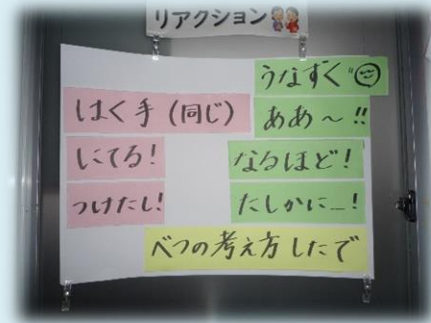
▲子供たちの一番の環境が机の上である。おはじきなど(具体物)、おはじきボードやノート(自分の考えを持つためや伝えるため)を机に置き、書いたり操作したりするとそれだけで机の上がいっぱいになる。多様な考えが出る時など、考えを共有するためにタブレットを活用したいと思うが、机の上におくことができない。クラス全体に視覚支援をする手段としてタブレットの効果的な活用も考えながら、環境の整理について考えていく必要がある。

(6) 今年度の取り組み (2年生)

自分の思いに自信を持ち、伝えることができる子どもの育成

□実践報告

対話につなげるために、聞いてもらえるという安心感のあるクラスづくり(聴き名人の型の提示)を行った。また、マイクスタンドを使用したり、座席の配置を工夫したりするなど、話しやすい雰囲気をつくる環境設定を大事にした。



□成果と課題 (○成果、▲課題)

○9月以降、聴き方の手本を示したことで、誰かの意見に対してリアクションが活発に起きるようになり、そこから学習を深めることにつながった。

○リアクションがあることで、発表したい児童が増えた。

○マイクスタンドは、声が小さい児童や発表が苦手な児童にとっては、安心できるツールだった。発表が得意な児童の中には、伝えたいことを強調して話すことまで意識した子もいた。

▲型通りの反応をしているだけで、本当にそう思っているのか、本当にわかっているのか疑問を感じる部分があった。教師の深める発問も必要で、個々で技量を高める必要がある。

▲聴きたくなるような話し方を教師がすることが児童の聴く力の育成につながる。発問や意見のつなげ方について、さらに考えていく必要がある。

(6) 今年度の取り組み (3年生)

主体的に子どもたちが意見を出しあって深められる授業

□実践報告

表現力を育むために、①語彙をふやす、②ものを感じ取る力(感受性)を育む、③相手に伝えたいという思いを強くもつ、の3点を重視して取り組んできた。各授業の中で、子ども達が話し合う機会を多く設け、「話し合ってよかった」という経験を増やしていった。ドリームステージ、6送会などの行事でも、子どもたちで振付を考えたり、どのようにしたらよりよくなるかなどを考えたりするなど、集団を意識して思いを伝え合う機会を多く設けた。

□成果と課題 (○成果、▲課題)

○自分の考えを積極的に伝えようとする姿が増えてきた。
○グループ活動で話し合いが進むようになった。また、子どもから出た疑問に対して、子ども同士で話し合って解決することができるようになってきた。

▲話し合いの中で友だちのいろいろな考えにふれても、最終的には最初の自分の意見を貫き通す事が多い。自分の考えを深めることは、まだ難しいように感じる。意見の交流会から話し合いにしていくにはどうすればいいのか、今後も考えていく必要がある。



(6) 今年度の取り組み (4年生)

自分の考えが深まったと実感できる社会科の授業づくり

□実践報告

身近な資料(瀬田、大津市、滋賀県)を使って学習していくことで、地域の一員として自分の住む地域で何があったのかに関心を持たせ自分事として意欲的に探究していけるように、資料を精選した。また、「何が気になる？」と問いかけ、子どもの思考の流れを予測して資料を準備した。児童の思考の流れをあらかじめ予想し、児童が「知りたい！」と思える発問を連続させることで、探求したことを人に伝えたいという意欲を引き出すことをねらった。

□成果と課題 (○成果、▲課題)

○自分の考えの根拠のもととなるものを、本文から読み取る(国語)、写真やグラフなどの資料から読み取る(社会・算数)を積み重ね、感覚的に話すのではなく、考えのもとをたどる力がつき、根拠をもって表現する子どもの姿が見られた。

○適切な資料を提示すると、「必要な情報」を自ら意欲的に探し出し、資料をもとに表現する子どもの姿が見られた。

▲多くの児童が資料から必要な情報を得ることができたが、資料の提示だけだと何をどう見ればいいのかわかっていない児童もいる。→「二つを見比べて違いを見つけよう。」「～を見てわかることを見つけよう」、「資料に印をつけてみよう」などという明確な指示を出すと、意欲的に学習に取り組むことができた。「見つけられた」という達成感や「わかった」という自信につながるような、的確な指示が必要である。

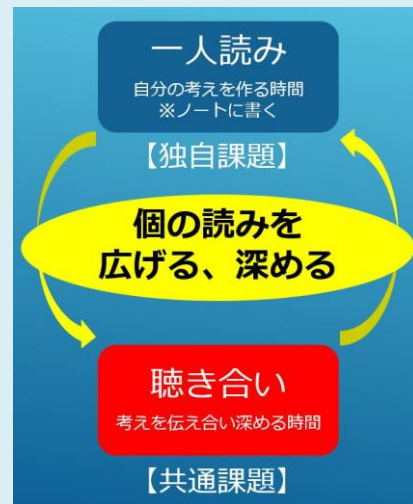
(6) 今年度の取り組み（5年生）

「つながり、学び合う」子どもの育成

□実践報告

思考の深まりに有効な対話の課題・発問の設定を行い、「一人読み」と「聴き合い」を柱とした文学作品読解の学習形態に取り組んだ。また、教師が教材について深く理解をするために、9月と2月に文学作品の読解学習で教材研究会を実施し、教材（作品）を通して、児童につけたい力や、着目させたい言葉や表現、中心課題等について検討した。

「書く」ことには、考えを整理したり、理解を深めたり、新たな考えを生み出したりする効果がある。そのため、書く機会を増やして、児童の思考の活性化を図った。



□成果と課題（○成果、▲課題）

○指導者は個々の独自課題への支援の仕方、思考を深める共通課題・発問づくり、児童同士の発言をつなぐ授業づくり等の実践力を高めることができた。

○児童は、「一人読み」で、自律的・主体的な学習態度を向上することができた。「聴き合い」で、対話が自らの考えを広げたり深めたりすることに有効であることを実感することができた。

▲本学習形態は、児童にとって初めての学習方法であるため、4月当初から学年で取り組んで積み上げていくべきだった。

(6) 今年度の取り組み (6年生)

言葉を味わう国語科授業 ～「問いをつくる力」と「読みをつくる力」の育成～

□実践報告

めざす子どもの姿に迫っていくために、国語科の物語教材において、「子どもから生まれる問い」と「言葉に着目すること」を大切にして授業づくりを行った。「子どもから生まれる問い」については、物語と出会う場面、友達と対話をする場面、ふりかえりを書く場面で、子どもから問いを引き出し、学びの意欲へとつなげた。「言葉に着目すること」については、書き込み用のプリントを用意し、一人ひとりが教材の言葉に着目して自分の考えを持てるようにした。また、友達の言葉に着目できるように、対話の中で友達の言葉につなげて話す経験を積み重ねた。

□成果と課題 (○成果、▲課題)

○自分の中に問いが生まれたときや友達が率直な疑問を投げかけたときに、子どもが主体的に学びを進めることができた。

○言葉に着目する経験を積み重ねることで、教材や友達の言葉から考えたり、友達の言葉につなげて自分の考えを話したりする子どもが増えていった。また、言葉に着目させることで、子どもの言葉が長くなり、感情がこめられるようになった。

▲一人ひとりの問いが違っていて、また、その問いが変化していく中で、子どもの問いを中心に単元を組み立てていくことの難しさを感じた。個別の問いを大事にしながら、単元につながりをもたせたり、協働的に学んだりするにはどうすればいいのか今後も考えていく必要がある。

▲対話を通して、自分の考えを深めていくことの難しさを感じた。4月の段階から、自己開示と他者受容の場をたくさん作り、対話のしかたを伝えていくことがもっと必要であった。また、子どもの読みが十分に深まらないときには、教師がポイントを伝え、子どもの背中を押していくことも必要だと感じた。

(6) 今年度の取り組み（わかあゆ）

わかあゆモールを通して、友達とのやりとりを楽しめる子どもを育む

□実践報告

「わかあゆモール」とは、お金や物を数えたり、料理をしてみんなで取り分けたりする算数科の活動、手先を動かして想像したものをつくる図画工作科の活動、仲間と協力して、言葉を介したコミュニケーションをとる国語科の活動などが組み合わさった合科学習である。友達と協力してお店を開き、お客さんとのやり取りを楽しむ中で、豊かな表現力を育むことをめざした。



□成果と課題（○成果、▲課題）

○2年連続で行ったため、見通しをもって活動することができ、「こんな風にしたい」という子どもたちの具体的な意欲につながった。

○やりたいものを出し合う中で、仲間と協力して1つのものを作り上げることができた。他の人の作品をみて、「自分もやってみたい」と思いをもつきっかけになったり、日常生活の中にヒントを見つけ出そうとしている姿がみられた。

○お客さんとお店屋さんなど、様々な立場でコミュニケーションをとることで、豊かな表現力につながった。

▲集団の輪の中に入れない児童がいたり、自分の思いを大事にしている分、友達と折り合いをつけられない児童がいたりする。そのような児童に対して、どのような手立てができるのかを考えていくことが今後の課題である。

(7) 研究のまとめ

1年間の学年研究を通して、ともに学び合うための「豊かな表現力」には、右に示す5つの子どもの姿が基盤にあることが見えてきた。これらの子どもの姿に迫っていくための有効な手立てについて、次のように整理する。

- ①主体的に学びに向かっていること
- ②多様な子どもが学習の土台にのっていること
- ③「読み解く力」が育まれていること
- ④自分の考えや思いを適切な言葉で表現できること
- ⑤学びの深まりを感じられる対話を積み重ねていること

①主体的な学びを生むための手立て

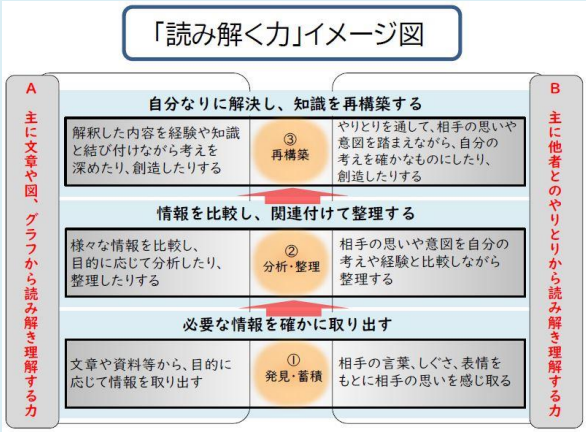
- ・子どもから問いを引き出したり、子どもの思考の流れを予想したりしながら、子どもの思いを単元計画に反映させていく。また、子どもが自分で判断したり、友達と一緒に決定したりする場面を多く作る。
- ・子どもが考えたいと思える課題や資料を精選する。その思いを後押しする環境にも工夫する。

③読み解く力を育むための手立て

- ・自分の考えの根拠のもととなるものを、教材文や資料から読み取り、考えのもとをたどる学習を積み重ねる。
- ・話し合いやふりかえりの際に、友達の言葉から自分はどうのように考えるのかを表現する経験を積み重ねる。
- ・友達の思いを感じ取る感受性を育むために、国語、道徳、日常の場面において、登場人物や友達の心情にたくさん触れ、想像する経験を積み重ねる。

②学習の土台にのせるための手立て

- ・学習時間に見通しを持たせたり、学習内容を焦点化したりして、授業のユニバーサルデザイン化を図る。
- ・一人ひとりが具体的操作ができるように、教師が教具の特徴を理解し、算数ボックスを効果的に活用する。



※「滋賀県教育委員会『読み解く力』イメージ図」より

(7) 研究のまとめ

④思いや考えを適切な言葉で表現する手立て

- ・スピーチなどの話す経験を通して、自己開示と他者受容の経験を積み重ねる。
- ・文づくりや辞書引きの学習を積極的に行い、使える言葉を増やす。
- ・相手意識と目的意識を常に持たせ、どうすれば伝わりやすい表現になるのかを考えさせる。
- ・ミニ作文やふりかえりを積極的に取り入れ、思考を表現する経験、表現しながら思考する経験を積み重ねる。

⑤学びの深まりを実感できる対話を積み重ねる手立て

- ・対話をする必要感が生まれる課題を精選する。
- ・聴くことの価値を子どもたちに伝え、聴くことが楽しいと思える学級文化を醸成する。
- ・対話が生まれる話し方や聴き方について学級で共有する。対話によって学びが深まった場面があれば、その価値や要因について学級にフィードバックする。
- ・子どもたちによる対話が活性化するように、教師によるつなぎ方や問い返しの発問を洗練させる。また、そのために教材研究に努め、授業づくりについての理解を深める。

ともに学び合うための「豊かな表現力」を育むためには、以上のような手立てが有効であることが、本年度の研究を通して明らかになった。学年研究という形を取り、それぞれの学年の強みや実態に応じて研究を進めたことで、「豊かな表現力」を育むための多様な手立てが見えてきたことは、今年度の成果であるといえる。その一方で、それぞれの学年の中で研究が完結してしまい、学校としての成果や系統性が見えづらくなったことは今後の課題である。次年度は、今年度の研究で見えてきたことをいかしながら、学年研究に留まらず、全学年で思いを共有しながら、校内研究を前に進めていきたい。